大成會席

新編後三

へ遠13
1707
8

横相新
山本堂
伊勢傳

序

文倭歌八目又見へぬ鬼神をも
感ぜしめ人の心を和らぐる
たゝし歌も又同じ事とはいへ
舞の面白き所をよくも抜き出
方寸頭角咲をなす田舎
方言も振そでをよびて婆嬢老
ゞ者耳瓶の出物なる下女の高

へ 13
1707
8

笑ひ下児は森もり茂り繁り
酒事をあきよ家内は繁ひ
も絶耳世の一徳あらび
や喜甲乙を定めよを思
潮ふようおもいぐさと讃
えぶん会紙の数多やもう
ぶふといと戸上戸ひとしく
呼ぶ人もきあん儀当人を多

かりめいづを煮せぬたかしは実
だく齢は延ふ世帝名諸
好士曲るしたまへとしらふ

中ゝ

小春月

橋香亭

吹去七席目

時勢詞大全

橋番亭瓶吉撰

第一 武彩流
第二 杜子
第三 花笑
第四 青奴
第五 牡丹
第六 猪牛
第七 小河
第八 九山
第九 若里
第十 朱楊
第十一 小河
第十二 武彩流
第十三 杜子
第十四 花笑
第十五 青奴
第十六 牡丹
第十七 猪牛
第十八 九山
第十九 若里
第二十 朱楊
第二十一 小河
第二十二 武彩流
第二十三 杜子
第二十四 花笑
第二十五 青奴
第二十六 牡丹
第二十七 猪牛
第二十八 九山
第二十九 若里
第三十 朱楊
第三十一 小河
第三十二 武彩流
第三十三 杜子
第三十四 花笑
第三十五 青奴
第三十六 牡丹
第三十七 猪牛
第三十八 九山
第三十九 若里
第四十 朱楊
第四十一 小河
第四十二 武彩流
第四十三 杜子
第四十四 花笑
第四十五 青奴
第四十六 牡丹
第四十七 猪牛
第四十八 九山
第四十九 若里
第五十 朱楊
第五十一 小河
第五十二 武彩流
第五十三 杜子
第五十四 花笑
第五十五 青奴
第五十六 牡丹
第五十七 猪牛
第五十八 九山
第五十九 若里
第六十 朱楊
第六十一 小河
第六十二 武彩流
第六十三 杜子
第六十四 花笑
第六十五 青奴
第六十六 牡丹
第六十七 猪牛
第六十八 九山
第六十九 若里
第七十 朱楊
第七十一 小河
第七十二 武彩流
第七十三 杜子
第七十四 花笑
第七十五 青奴
第七十六 牡丹
第七十七 猪牛
第七十八 九山
第七十九 若里
第八十 朱楊
第八十一 小河
第八十二 武彩流
第八十三 杜子
第八十四 花笑
第八十五 青奴
第八十六 牡丹
第八十七 猪牛
第八十八 九山
第八十九 若里
第九十 朱楊
第九十一 小河
第九十二 武彩流
第九十三 杜子
第九十四 花笑
第九十五 青奴
第九十六 牡丹
第九十七 猪牛
第九十八 九山
第九十九 若里
第百 朱楊
第百一 小河

早流法

和尚さま、いのの天人、仏のもうしあり、仏でもあり、どうあることでございます。アレハ伝記にもそれども、夫婦中ごろて、一連流ともいはれども、夫上の果をかてもあるの家内あるとのが、それぞなんの事柄でやと流せるもとアるを疑いるのでございます。男ハ行るあるまて、それらその男ハ百貫漢じや

武彩流

いはしへの樺の果も今ハ下女だよもはるとぞ、民女房と二

又ゝ伯乗、その日もせんこうらをだいての中と門へ出れば、
直よりまた一所ちかくに風出せし法師通りかれば波羅人
見て法師どこへ行ぞとて、法師見へ酒楽さ多おそれしや
く、先おもうもおそれいで出月出ゝ酒を多をとり
回へども多へ久一ツ多をとらもあり法師支へ瓶
しといつて酒を古仮へもあまくふてをたべ、主と
いつて女房出れば盃を指とて女房へ猪多へ立ちさげみ杯
徳利をとりて見て居る。酒を杯出居るとあるとと
思へども法師たべうのひとて通答もせず。酒を法師くといつて

法師がハイ。源氏まさ夜のよおりて参るか。イヤ、藤は絡ませぬ
がさりとはまや松むしに竹へ入ておりまする

旦那贔屓

丁稚三人寄の合。おらの丁稚がいふにはおらちの旦那はきつい謡が
名人じややげる。鉢の木をうたはれると雨がこぼ候ふ雲が降ことふ
又一人のでつち。おらちの旦那も能がきついて上手じや。代る道成
寺の能をきられたら。鐘入の時なが大きさ音がして。一人の
丁稚がおまけぞいのといふと。おらちの旦那もうなんの
上手で先年。熊坂をやられたら。長刀で盗人が逃た

慢咄し

去道具屋に二三人より代言。九兵衛 桜松は夕ア太なく日の丸
の扇子を広げさげでます 桂八 其日出といふが大いといふ十里
ともいつさらどおまらぬせんくわれど 九兵衛 イヤ十里や百里と
ハいふまい 桂八 聞を仕ふし それならば千里もあつさり 九兵衛 イヤ
桂八 それならば大きいといふ。あるが強あつさ 九兵衛
されど九雲に背さいといふ

日蓮豆

去所に綿摘の揃ひたる人あり。出の亦へ行けば白七八人も

あるひとの話に、ある長者の娘に婿をとり、床のうえに婿入の揚げものをかけてあるを見て、アノ揚物はなにとなれいろへ長崎の中に女中一人でなくてあらうがだの人じやあろうか、私やおそれさんじやあろうがおさよさんをおハエ、私やたまさんがよいなア。イヤ布袋さんがつくつとしてよいろとの仲コナ。だまりのあつさーやなげやうさんがよいをとこいをなく笑て、ひのたまのようませさぞよーてげやうさんがよいへれーやだろれても絵がはやるよ

洗ひも茶碗切味

ある所に、きけおーきいと浪人者をたくさんの金を出し、ものしーあるとーあれだいろくぶをはくしに石業して武士の常に、それだとて切ろう強盗と出るみ、思ひ三をのようなんを、かくて既中に日だろう出したりさやて武松なるものの所へとりなる示へ旅人通りかふを彼浪人をあつてゴヨしくとなひつけ。旅人をよやそーじやと問へハイヤ、ちくといあるとりぬつく出さろ代至て中けといやいるそーとぬてかの浪人をたげさーあた臣てあり、れだ彼死ろいたさまをとちうれーや古をでたをうひさ

儀礼

右ハ必ク舎馬宥探話稿第三の物ニ有

次の汚手

振つるべをそこづーしあげんともつるべ綱をは
てありくつるべをとりにくんとそれぞかりぬき井戸のうち
さぶとうとわけてまんくらあつ出さんはるべきをつをかりこ
うめちづんぢりくたるかりのあるをこ絡須ニ又
井戸あり、ありもせぬものでけバあらくらり先長
つぶうとおろる汚紙を井戸ニあるべバ綱ヲハアクワサメ

兎仕出部屋

栗さん。おまへ　アノ　今日長崎さへ　抵抗とケレ　長工　アノ　れんどや
おもひ　分ごまこと　絶対はして　ゆるさぬ　あらうたらぢまこと
持んまつ　れんどや　白ぢりめん　縮緬はして　あけること　イヤ　れんどや
ものそ　縮ぢりめんで　おまこと　アて　あらふ　あんる　云イ

豊二年の脱

行　山里まで　近頃　あさを　少　うきを　たしよ　祖父
祖母　連て　大坂　芝居見　あるまり　日本橋の　あど　屋敷
浪　拾　残　九百　たらぢ　ぢうて　出　秋人　ようれ

あげつぎそうな　私を　して　おんと　おもて　代　流　ごりや　笑
遣　山　おまへ　せぬ　長　八　ひ　まり　物　を　ぢぢ　ぢ　代　まり
笑て　今　の　おまへ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ん　親　父　ぢ　く　悦　び　祖母　く
悦　び　や　ア　ア　の　ぢ　ぢ　ぢ　世　中　ま　あ　ふ　ま　や　ま　の　ま　ぢ　ぢ　や
ま　ま　大　坂　も　流　の　ま　ま　年　ど　や　ま　ま
ま

延　彼　ア

むこ　く　祖父　と　祖母　饗　屋　の　方　へ　ぢ　サテ　今　日　は　清　ま　ま
ぢ　ま
ま　ま
ま　ま

まど・松やゝあるさうに成へ時代ゞ遠くなりて一向に当る気
あれ・あるさうれも事も・当代の咄しへ迎もそうゞ遠ゝ成ばしよ
さうれ・イヤ〳〵そうでなく〳〵・是まで云毎に極まを
ゆよ・どうやあるさのの面白のものゞ・ちりめん〳〵まから
を表ます

話大全三の巻終

英笑話見聞　性急斎玄暉　八席目　全一冊
面白き笑話　咄評判の部くこま評　二席目　全一冊
青陽戯誌院　恵方軒福来　九席目　全一冊
右三冊近日板行出来仕候

横切御通
右へ必く金馬宥様話種目四十軸宥
文くの茶カ

去嬉・私てもなり・私前ゆとも足へ・江戸也りの私
でハまれし・サテ〳〵・如つさ私ゞやとよく足れ
だ・何やつ第を大分つ・第のふさを足出ゞ指二万
石前・大様とうとの書付・あまり不思議ゝ・
〳〵・私ゞの此私いゞづくめのでおざる・是ゝ此私ハ女
後の後へ・ゆまん

内弁のせりゆ

所ゑぐまを西楽座を出て弁ゑ墨ゑで人がくひがりて座

れり山伏通合せ見しよそゑゑ指て座るハ行ゑどゑと

問へば吉れゑ見ハうちゑどゑやとゑぶゑゑゑゑの変問ゑまてゑゑ

意ゑ家ゑ弁ゑゑゑゑ平都傳ゑどゑやとゑゑ。問へ迄入歌又どゑの

アノ山伏わゑゑゑくゑゑゑゑゑゑイ有ゑゑ我ゑゑ指て座るハ行ハ

じゑやとゑゑ有ゑゑどゑやとゑゑされゑゑ山伏めゑがめをゑゑゑゑゑ

問ゑゑゑてゑをうちゑゑ弁ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

イテ通ゑ吉ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

と同じ山伏どやいてでいろ。おまはてこれ山伏あるを。
飛ばしてもやいてもらい。喜ろ。ひもちんで行。まく〳〵くとゆべ。
山伏治むけべ。おまいもんでおざる。山伏ようとまりといふよ。
喜ろ。ぬらくぬ教でだのしやでまつておざれ

徒先

嶋さんお供ようけさよりてよりまもる。毋まくよ来さ
コレ道よりせどとろふ。往まや。ぞふどや往てかりにろ十日
よもあれが。西川深で勤ようろ。アイ盃い落るとよふぶ
ざりまもが。欲い。毋くろ文るりて祝むふろ。イヽヱ

ヱ。おさんが。毋ちりあるろ。イヽヱちりてどや。ろが。歌の
やうちりろの毋ようちりろ

京内ちり

小西の人。紙屋を合へけて。ビやて京へのぼり。京の旅
籠屋ようてちりやうの。ろうて。ろうろ。枕草子を見物。
あまこれのようあれやのどと。ろれだ。喜ろ。出発の。ちり。
が。ぞるようて。盃。牧が。出まろると。入まも。ろれと。中賀へ。
彼宮のちりようろ。教をつろ。ろ。
入れて。盃。しやも

弥陀の光

家又名を世へ名浦浜の一家仙と又京富家の名人と
代参又数多夫つれ我拾ふとて西の海四人漁を高
の別屋敷を建させ大屋こりの人来てきの咲今や
くと初りを待酒肴さいつ事人の数多百五を長
て娘中仙と仙さん人アノ掛あて画ていろげ有り度と云
七福神の内ゑかア仙様ア七福神の内て福禄
寿と云て今寝浜山又食分多く寺こと云ゑ人者
の長い人ゑ弥又八限りのなれとの我も後孫ゑ人あり

たい娘私もあやうい云アノ中ようつもりげ者ようしてかりべさん
おごりさん仙アノ他をのやう方ゑ者ゑ後ゑ者ゑ
かうこそ娘サイナア あの母ゑ方ゑ者ゑ
孝の母の曰
伝隠居おやうもおごりさせわうこれハ会源度ゑ会ごり
こそアおこりなれ母ゑ者ゑ
サテ大分芝居ゑ者ゑ
きちうこそむゑ者ゑ
ゑ芝居ゑ者ゑ

膚よう、爪のあい手拭ぞうきんおろしでおろしでたべまする。金平牛蒡
でも、食あいよいまりまんべうさんべうさんべ。貝せうこざりませう。
高ひし、ゆで大豆、合そよ、和へ物、ものとり、二五十七八の
うのヒい、ゆえ、お菜いげませう。

一下　遠

玉焼屋の親又、近所の娘又、物こまこうがあさんでいさそも、合
点せまんといもの玉焼ようまもて、嫁方又、出うけ、
よ人も、色と、後娘の、使ようり、姉どんどやと、脇中をたけ
べ、娘ちんまいこべ、晩ようにくわいさくまつやぞんまろと、

以で、又あう、ふうつく、親又あやなまろめと、血のたりくか
ぶりくいろまなぶくまって、戻り、ユリやく、玉物の角の、玉焼
のそさあ、なんと、まてまこ、九て、今こ、丁四、ハイ、かさ、ゆべ、娘

蛞　妖の孔明

江戸より、出り、侍大法よて、蛞妖、悪形、なるよ、色、まもめう、ムウ、色
より、金、作、奥ちんいてそ、ハイ、ハイ、百文百文でおざりまんまんまんまん
百文、指よまりけん、よて、百文、ものを、ぬしゃ、あア、侍、吹て、小家
して、あんとぬりを、所を、ものを、ぬしと、云っこあ、イヤ、おまんまん、友の
ぬでやおざりませめ、イヤ、所、大ざりるよどや、イエく、私、ものど

おざりません。ナニ銭ですと六文よ。それでハテ　かくれやうもござりませぬ
とやらでござりませんよ。これはどうじや。所を出しよつてさあ。

二四八ツ橋

在所から来て、道頓(どうとん)のおとこをよんで、御亭主(ごてい)人を道頓堀(どうとんぼり)へ丈
近所(むら)の者と云付られたが、ハイ私は道頓堀へはまいりませぬ
新町(しんまち)橋を通つて行たが、ハイ知つておりません。モシ新町橋へ行き
渡るとき(えへ)を六文よ、すると四ツ橋といふてお橋がござりまする。ハイ、そこ橋
を渡つて六文よと、是も四ツ橋じや。アコテ川沿と頼んで行て
それとおしへる。見て寝ほしさと箱(はこ)挑灯(ちやうちん)提(さげ)て新町じへ来て渡(つき)

らば渡銭(わたしせん)ものじやとおしへの通り、まつすぐに来て、あそこ戎橋(えびす)が
四ツ。サテモ珍らしい所じやとてん様へは四ツ。橋を渡つてまいりませ
よ。モウ宿をでまする所の書附(だんでうろ)でどうとん堀の川沿と云ふ所
である宿を尋ぬるとべやうお宿へたんぐやじや。ソレハ宿
の四ツじを渡つて六文よと道頓堀(どうとんぼり)じやとおしへらるゝよう
おるを六のあがる文おと〳〵廻り。宿が今の四ツじと気(かん)付て道
とさかて六文よ渡て又宿へ新町じ是へもどしさあじやと
かきおるのあんでも宮丸一度四ツ橋へ往て見てとふ又四ツ橋へ廻り
コウ渡つて又コウ渡つてプウとコウワ。コウ渡とさあさのみち

どや。コレハふーぎと必勢の因。恵イ者和歌さ色白方姿
川岸より上へあゲるを見て。そろそろどやめろあと肩よ腐を。

俳名の号遠

ナニト浩所云。上方ヨリ来ルハナルホウ。イヤ仏ヨモ知ラヌ
ハ知ラヌ。サテ上方の芝居で芸者のよとく役者の名を長ク和
流ガ俗名ヲハ。この字を付て来ルまる。てア角の芝居なの
小川とゑゴ出ると。ヨウ英子ト云て来る。雛ヤを張物。岩ヲ
を屠子。浩鼎三ガ出ると。こんーなるく。浩下ヨ。この字を付
来まる。そ方ヨ見ヨ。役者ガ出ほとさ云ビ下ヨ。して

見ル和流ガ来ル和ガ有ルめられだ。役者の口ヨリ上リ
話大全三の巻終

▲以下書記し中板表仕ル

順會哨敵立　場　合大原　四席目　全又冊
智恵競哨掛　笹巻亭對蔵　又席目　全又冊
新撰噺番組　第花亭流ゑ　六席目　全又冊
時勢話絵月　必ゝ合馬宿　七席目　全又冊
古撰哨評判　役者ニ流ル不定の例ヨ方ひ位分を定ル哨の甲乙を拵む別芸和席ゑ　全又冊

右の本品正月二日より出ル中録ゆ発ニ売ル

咄三七席目

時勢話大全巻三

橘香亭瓶吾撰

壱番 乾坤	対壽	壱二 住吉詣	海江
壱三 鼻ぶり	不猿	壱四 人う清姫	朱橋
壱五 蓋の紋付	浅山	壱六 緩の神	杜子
壱七 鶯	泉義	壱八 疫明の山葵	[redacted]
壱九 大江の巻	大深	二十 油 若笑ひ	菅丸

乾坤

芝いしくお教ゑきつうと医こそ　アチコチ庶も身
こぶよりふお服あくりすせ女　んさおおあれさうおあけな
されろ。ハイ疫お存らを医て。べこ〻右の仕合

仮名話

小演舞茶屋の女代ふ沙汰　紅を塗ぶ。
先きく　でそ半が教とゆを　ゆわさ〻ふ抜ゑ文ぞうの教れ
だ。何でも人う宮の式ろう仮者〻系り。道をぬう魅むべしと医
一人り教ゑ。フト道づき安来。乃運の男　あ者さも仮者（ハ系

ろくそうあ・アくいのでも出てんぢやうあ宮でおさうりまん・おしらしい
茶のお湯でハ・実入うあ・ぬおざりまをうてやとのべ・ふ代エて
ろくふも体まのうまうあ

節分

コリヤ〳〵　豆取板のお尼ゑ年・お役ハ中せとそ・ハ出せば・大喜ふ
色ざいり豆と小判ゑ・裁きて・尼掛一ト口ハ出ととぶ・ふ
西沢をと・廣庭ゑ表ゑを・宴中ふます人・出今ハ門ゑ入て尼
さうひ・ヤアう・月出ふ・ハ・ゑ・ふ・ふ・ふ

孫ハ万々の東方朔ハ九千歳とやまん次の子ありしまん浦嶋
太郎ハ八千ぶん三浦の大助百六つとやまん扇紙と筆つち
くよ歩かべコリヤく夜中の對面ハ叶ぬと只さんさん
明日ハ新橋の渡り初一寿ハ万年の亀

今清姫

長崎よ有若き壱人の女を佞りよ契て夫婦よなむくなまの盟
悋気ぶかうと我ハ婚礼をあぐ内縁轆首のまを咲出
此男なまらとも夜の首よ思ひ出迎る夜よ猿く首是を
咲なちまちうはじき首ぬけ出て追女房よ寄る猫よ添へ帰り

先きへ寿り湖を越山を越ゆく奥州まて追来りしが余り
の辛労さよ始る畠の畝よ体もおもこまよおびたゞしき里いも
あり先息休ざと見ハ頭ぐろ首いもをあまさ喰ハあれた。
長崎でブウ／＼

盃の紋付

去寺の和尚旦家へ法事よ来らまいろ／＼と馳走よあいし
くと亭主縁をもてなれど亭主の席の緒出向ハお子のお吸物今日
ハ親付ザツく馳走有まべーと云へハ和尚イヤモウ馳走の限り
膳部ハ皆京焼だらけでござる又ハ気をとられば じさか。

まづ〳〵お体あぶれませ。和尚おく〳〵まうさるなて所来の剣
焚男竈の火より中伝へさる。アノ今和尚さるの作らまて
ゐへがりとへてア。どのやうな仏さるでござりまん

福の神

コレハあびさしい光明のでア。あんとあさのどや。サア少メてたも先
度考れと大坂へ往さ時。中の芝居のさんざきさ芝居さるなは
おもろくで。又さ百大坂へ出かけて日比伝なる長所裏の昆
ゆ門さる。逗入て。おどろく迷ゐられだ伝ゐとも。夫者くん
ど内戸性の内ゐ。恵よ。ぶんさあう。面ゐでもるくと出て

来て。汐の中へ大のさ。ソレハ目出さんそん命つそ女鼠も首尾
よう。三浪でも仕て連て帰りさのう。イヤ〳〵モウおりべ〳〵れよ
福の神の。ゐ久。徳ゲるゐのう。ウウそん命つ月さ人の。おゐ。でん
安ふ。お後ゲ出来さう。イヤヤ〳〵生さまうもの

鼠

一日ゐのさ。ゐ人ゐ。ゐ命ふ。ゐれよ節。ゐよも近づきられべ
どうも仕ゐうもおく。イツウ死でのさ命。おし脳きれだいし
鼠を咬て。ゐて。おりの。者屋へめコレく。鼠の陸ゐ。あらゐ
ゐりゐまゐ。者屋ハイ。おざりまもとて。筋ち。出直ゐ者

又でおごりまん。客ソリヤきろんが魚イ石よせん

夜明の山菱

若ちやけのもり汽よ仲居もろんとあぐ呆。茶碗沈子よ白湯よ
茶を入て沈子渦二ツで産茶をころめる内。カノ大盃まんの大
盃を引よせ。きおを若むいと若ちやりは。アヒ仲居も碎刃
で茶の方のてらしでドどつぐ一ぜいくよあせ。スいよ子を大
てんのハンコでいあまんとろて内。カノ盃をクワトかして。
吉敷方そろそろ新よ。つこをとかさどそろ盃。チョト
いごぶたりさの紙となろあたいても白湯のチャラリう。沈い

蔵ろるがくかさおごりで。ぞうかうやろ産茶も網。又も
ものよとて盃よ大盃かろんいのる。今度い仲居よ服くぜ
て。酒の方を丁どちく。大盃一ト口呑ンで下よ盃。帯も
あいたりやちらよせう

大江の岩

去年ひろ嶋がけやうよ時分のハぞよあさものどやブイ。
サア対めたがどや。集えぐ神。通者じやよものて縁病
さ夜をまのらふ。又でけやうよ去ハ嶋がさ年りまん。バテ
又いやくんも為稲荷さ夜を祭ととそ。ぞ地ごぞもてえ

ゆふらのでそもうあるまうこそらめどや。サア支でもいあり
う孤は遠のいたん。ムウ　フウ　ゆりても孤や狐の化ぐ長柏
よ月せよあんらのでなし。又孤の友とりでもあるまん。ハテ
扨考拍手をうよこそ毎年ど。孤どやとい今を沈橋いの。
何ぞでもかーこそも皆。金〻と云まそふ

若　笑ひ

ヤ親父さ及ぶ山るの人相よおそりあるれておざりまんそふな
豚おざ〻れう相チョトはらしてやさりませ。親父子を見ん
ま親まうぞ相見るまよ及ぶ。皆よ　イヤヤ支でもまの

見親おざ〻ヤヤまんどや親父何をぬかさやう。親の
おろまおざ〻でおそいる。皆よ　イエ〻〻そ親のひ子おろ
どいるうむし今の世い皆子のおろ親おざ〻ばいの家はさ。
親又ここのいまうは見てやろと夫服装を世教よあ
て。先親よ似て保寿宿ん　おひし今年いたのそ〻
じや。ここ山さんざんのおころをれと者でくなりホウ。ろ
あんも見るあんなんも見る。ゑひて出あるあがよ。イ
ヤヤ女紙いおざりまをあうよ。親父せんをを口かう
時鄙話大全三の美終

咄会七席目

時勢話大全巻四

橋香亭瓶吉撰

三十一　味くらべ　蛙沢　三十二　源　三十三　服部屋一換　雷山　三十四　弐九　三十五　蟹の頓狂　五粒　三十六　二ツ遠　三十七　里の仙人　本所　三十八　口　三十九　境の顔　香笹　四十軸　真田山　豚　堂外　古方郷　二巻　不落　紅蘭　猪　鬼四郎　桂峰　二巻

味くらべ

若の若二三人寄て飯汁を喰ふて居る所へ友達来る。こゝの若ホウよん所へ来さ決始じや。サア喰へと云ふれば。友達飯ろ。イヤ〳〵はよ喰う。若の者ハテ扨きさまも喰へさうなものじや。ぜんかの中へはよせんと云ふ。友達ぜ毎ろ気味が悪い。ヒて飯ハ一生喰ふまい。況又の思ひあんじやとゝへバハテ時の移り方のじや。是を喰ふバ男の用じや無こゝ。サア喰へと云ふて近へられべ。友達そんなら喰をゆと箸をとり喰ふれー。ガ。おだらく男業そイヤ〳〵。さてもおかごの方がよん

臣の矣

ふうふい谷

ホンニ　めぞへ見てくとあるが、さて秩の羽織の紋ゝゝ鳥居の
今迄まで、皆く相のとうり文ひとつ、ゝ形ぶかめてあるの。フウ
コレカ、見よ大分違ぶ有てや。先ゝ三の相ゝ七の相小判ゝあぶ
大国相、田代相をうつしさ屋紙ハ岩に相。ちゝ外利休相、蔵
相。角のさのゝ巻相。ふの丸いのゞ布袋相。はゝの中うあぶ戒相、
コレ〳〵待さあれそ戒相ハ仕ゝ少ゝ、ハテ行シの表ゝ
云まあよ。イヤまでも戒相ハ少ゝ名ゝ。サア文ゝ呼ゝ
ゆびきりうあきり

婚出し扶

去月利貞傷ましく小乃屋見世ゑ寄。珊瑚珠のおしやれ
付。亜麻仁布ぐく向へ。高人寄ゑ入わかとふ。男人八分ゑまけい。
高人貴り弟。実人寄ゑ入わ今て寄ゑ出。内へ廻てゑくく
乃ゑ。おのゑんぐども。さんぐども。余り亜麻下亜あり。亜麻仁
のへ。日ばゑり貞利貞傷もゑり方あゑぐ。人ゑ貞利教まん。
念ゑ乃へ。ばゑへ入ゑ乃ゑんと毒酒をゑーらくゑて。ゑ合とゑり
ばカノゑんぐ考。だらまちゑぐ。彼ゑり。ゑ寄ゑ。ぐゑ。ぐゑまんどや。

戎脂

コレく丈へ戎脂とや。ハイ戎脂とへあんのゆでおゑりまん。ハテ
ぜんへ歯月を撲ゑ寄ゑ。ゆもへ。ゑ寄ゑ。ゑを戎ぜんとゑゑんの。
ソレハどゑゑゑで戎ぜんとやまん。ザイノウ丈ゑ寄ゑ。ゑ
てゑびゑぜんじや。ゑゑ立ゑ寄ゑ。ゑのゑぐゑて戎脂でおゑりまん
ちんと笑へゑまぜん。ハテサテ笑へぬよりて戎脂

聾耳の垣歌

戎耳の垣ゑ入。信吉へ来給して下白のゑゑがく。今宮村ゑく
江家の召垣を。入く覗ゑ。ゑ寄ゑ。ゑ立ゑ。ゑ乃ゑ。ゑ乃ゑ。ゑ敷
菜ゑ。ゑどゑく目を張り。攻て。サテゑんゑん。ゑゑてゑゑ。ゑ

月半ばの菜を見て来さ。耳いふ自性をとがるよ。モクリ
ひろかものどやと。咲されで待る。春。夫人仙おでぶらうさん
今来どやとゝべ。ぶんぶ耳をあゝべ。こもるよ遊ていさ

三ツ遠ひ

上野　見つるやきさよ菜を拾てさん。きさハイとゝて菜を拾
でひろれど。上野よれやぶけど。きさ小春つよ。ありモフレ。お泉
さんぶ見てでおざりまん

里の仙人

友達日ざ仙。見へてきろ二人。春。仙人どやてやノウ。ピて仙

見さけだ。だこゝ戒屋の細よのうどやとゝべ今きて人の
友ぶ。春ゝハ。イヤサア仙ぶもはすで。梅ハぶあふぶ屋の春
よ。ぶって。春こいのと。咲ろれで。かこゝ。春田舎人。あれを竹。枝
く。ぶ。ゝ大坂よハ。朝やる。春よ。春仙人ぶ。仙春きん

口　豚

浄瑠璃。好奇人。公安さ。ぶ。ゝ。春も。盗もいけもせぬ。浄瑠璃を。
さりるぶ。そこ。家よ。ぶんぶの。波。ぶ。ぶ。ゝ。ぶ。ゝ。お人の浄瑠
もきつうあぶのさよ。ぶ。ゝ。ぶ。ゝ。春ゝ。ぶ。ゝ。彼人。波安さん。ハ耳ゝ。ぶ
るゝと。出て見せれで。ぶ。イヤく。ぶ。ゝハせあぶ。味噌のあぶぶ。大

分よりあのさ

境の顔

右八四く舎馬宥樸詰緑月格六書侍を

真田山

さなだ山穴の稲荷のどら寺汁・味の外の浦刺でおざりまん

おされべけるもを詩刺よそで承りはて者八拔ホこうぶ

あり・余り寺こだんぶよきさのふ先ぶけいこはこ校よふ

たきまるや・近るを稜を山道いこまそう主八赤ふ語

まん・おりしぶ〜寺を俗るよ馬の姫を入てむ〜ろを俗こ

おて俗と笑はこが・宣をこ赤ぶ・ふのもを赤りはて俗で赤おぶ

をまを〜・主を出ていぶで赤〜きみのろんものでおざりまんで

ハレかりそう赤・行のどら寺をるの蕪でたそりまをうぶ・ぶ

鎌赤〜赤〜ん

古方刷

おあさ女の山子長さ女八赤ぶよふおざりまんのでりのろうおお

るりでおざりまん・イヤ〜女おの赤のようそそえさ女の長さ女

山ろ女ひぶふとでアよのるいりでやざるも乃まを奴で鎧八雅

藏を菊て赤紋の赤也よも赤嶽よも苟炎のそてぶ引て蕪

志やう。でア　第一藝に情が出ませんそうかイヤモ何じや志らぬ
が稽古晩までも出ておりません商人もお座敷に彼まきやう。
昨夜のハ見へませんがどうぞ〳〵勘定があませぬザア何ふも
ほしがすハどうかで承いけて屁へぬけるので御かまひなさるよ。
イエ〳〵屁へハぬけませんがまへの方へたんと援ませんてや

咄轉語大全四の巻終

此末へかきたらし　口披露仕候

御忘咄角力　是升對山　権本下物　咄出初席　全一冊

立春咄大集　常筆亭君竹　同二席目　全一冊

井の内蛙

婦どの山の蔓をおうひ出けるを。ほんにおそろしくと表のおち合
まで追かけしがそふく後河まで追かけられませんさあくそれ
りどしとまでハ出されどぞうろうエ何も知らぬ返何ぶ上ることぞい
出かられるとの事でやハ出いと婦どをおびさせバ帰りがをむきだら
うり志て宮に帰れく

武斗の沙汰

此日京への知らせけるの。ヲイノヲ　京に何も珍らしき
ハありませぬかく三条の宿屋へ坊さ仕が泊られてが朝飯

又の天

を武士禁して、後又皆吟さげが、糸中へ見ぬふりや、行と
不思議かるのじや、家が、そん和尚もこそ、ヤ人る
ときでいろまんてや、イヤそうも云れぬてや、隣村の庄屋どの
の息子へ、古参も知って居る事、酒呑じやが、せんども大
坂へ参りよりでもさ、時きう、あれ中庄屋で呑とあ分

天を當

云てりがう、大和屋人、朋友の正ちゃーづ、是ハ八兵衛殿の
らしんアイ、已も、ムラ坊中山、世ん、ヨ、支ハ、ラ、ん、アイ
あっもぜりてうこ、ぐ、ほ、さ、うこ、あんで、ぜ、ん、ぐ、こ、さ、で

ゑの差

ゑゑ アイまゞ ぬ さ あ り い あ つ ま 天人 あ と 月 と で そ れ ハ 孫 う

しん イ や ま ぐ や づ し ん を の た を 月 と で あ ん ど や あ り お 月 さ ま

ゞ ぬ さ を ま て ぬ ぐ ん さ イ や そ て ア や ア ぬ う も 月 ま 月 お 月 さ ま の

ぬ ら ん あ り ん さ ま の イ や く く お 月 さ ま よ ハ ぬ さ ん あ ん あ ん と ー ん

ハ テ ま ゑ や り よ ハ 国 よ 赤 て ど や

かいこ蔟

二階の子供 ぬ む ぐ ん ど や く く と ん ぬ ま や く く ら れ ん ぬ と も

あ く や う ほ く 當番 の 兄 き る コ レ く く 皆 む ぐ ん と あ り や

ん て ど や ぐ く や う ほ ん ん あ や や ま ほ ん ん ま ん ま ま 迎 さ ん

の 青 ゞ 歩 ゞ ぐ く

漆

在 い 必 く 舎 馬 宿 撰 話 編 月 三 十 八 番 稿 之

小夜嵐

忘 備 の 四 カ ま て 極 示 浄 ち の 慈 昌 ま 編 魔 王 宮 浄 ゞ 月 ま

お と 後 ハ 半 ぢ 馬 ぢ 家 も 淋 敷 て ゞ ゞ ち お く さ と る 中

ま 浄 合 や 地 舎 行 り 集 元 ハ 扇 東 形 浄 者 ハ 名 石 ま 対 山

ハ 神 堀 ま の 山 安 者 ハ 巫 木 正 三 ま 外 冥 宮 僕 ま 神 宿 ま の

鬼 の 目 ま ま 足 宿 し の 越 向 も ゞ ど レ イ ノ 月 る 月 ゞ 青 定

〜大坂の写りを取って猫王（ひそうの泡を出さるるこを
入うとおもへばとあよたてけとぞ）の素紙巻られの十王もいろ
く思案の気中へ見て眼　中こまん　猫王　何ぞ　見て眼
本の咄を文庫目を対面の遊若とてつく対面が後の因板
能て咄を大分対教〜はしこ猫王ホイ丈いてアあの
こうこのたんとまつぶおくらのぐやよナア　能イハ後よ遊行
ちくまつ

夜の机

斉ちうで文育ちそくせよ子細しらるるこ云こざる　見れうう

かうコリヤ去次新池ぐ云ちイ文あうひちちあう行
を一ト節ちせ　パイ一節でおざりまんぐろうてあぐ
見へまうおざりまん　ぢへけして石榴をあうく

三ケの津

たまぐうしや　粧柳をおぢとはよ勝よとれ合ぢ方
ひぢ人社方臣ちぢ方　客板江戸でとぐよの人形ぢお
中ち学ふての文戻りまう京でうんぐ如良もとかちよとんと
せうじや　まちをかん　笑ぐ
見せ大根

寺町のゑんまよりわきに捨がらん立てあり。通りかゝる
西へ文書く人来りて。アレハ何の札でござりますと問われければ
子細らしく来盛ハ能がござる

口車

或遠方の遠国へ商内に参るが。上方土産として
大坂名物へおとおとしわされませんからハ先道頓堀にハ芝居。極
又住吉天王寺川口の名所の法ハ何と申りといふても
ござりませんと云ば。田舎人今云やうな事を申なと云か。
ござらぬじやと云ば。商人お知らされませんから長イ京の